

祇園祭の“あつさ”

2班 メンバー

伊藤 海希 (京都大学農学部 1 回生) 川向 正明 (京都造形芸術大学キャラクターデザイン学科 准教授) 神田 隆男 (神田オフィス)
古波蔵正義 (株式会社 コバック) 白井 亜美 (京都大学総合人間学部 2 回生) 坂東 憲 (株式会社 柴橋商会)

「祇園祭はあつい！」

この言葉をたびたび耳にする。

祇園祭が行われる 7 月は梅雨明けの夏本番の季節である上、近年の温暖化と人の密集のために、**暑い**。

一方で祇園祭を 1150 年もつないできた人々の想い、職人魂、神様への祈り、楽しもうとする精神は、**熱い**。

そして幾重にも重ねられてきた歴史と伝統は、**厚い**。

こんな様々な“あつさ”を調査してきた。

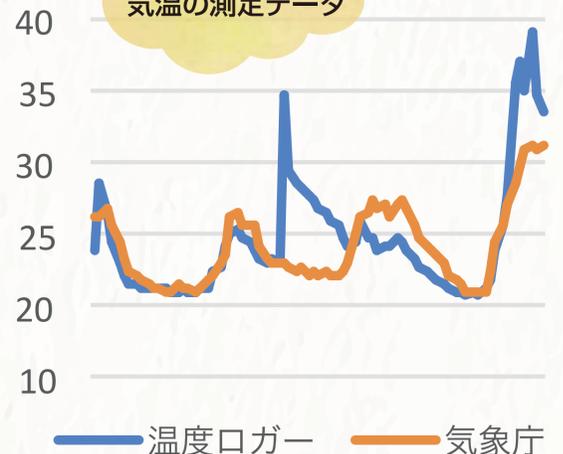


配りもの収集品

調査方法

- 調査① どれくらい気温が高いのか？宵山前後の長刀鉾周辺の気温を測定 (7/11：長刀鉾保存会の方へ調査依頼、7/13~16：長刀鉾に温度ロガーで気温を 1 時間おきに自動計測)
- 調査② 想いが強いからこそ無料で配る！祇園祭でもらったものとは？ (7/15,16：午後 13 時前後、四条烏丸周辺でくぱりもの集め)
- 調査③ 祇園祭運営者へ直接インタビュー (八坂神社&長刀鉾保存会)
- 活動④ 景観への想いを形に、和コーンの設置

気温の測定データ



関連する SDGs のゴールは…



■ 1150 年で**変化してきた**と推測されること

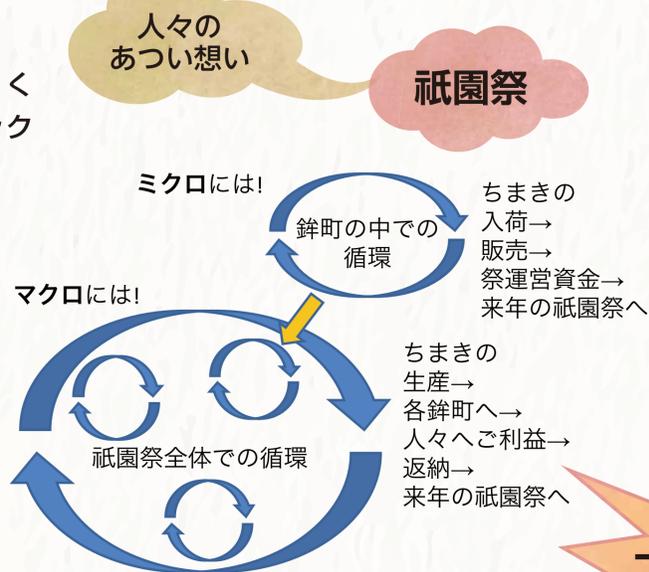
京都の気温、流行

世間の流れと祇園祭も影響しあっている。くぱりものの回収からはバイオマスプラスチックなど環境への配慮を謳ったものも発見。

■ 毎年新しくされるもの

ちまき等

毎年毎年職人の方によって作られ各鉾町に分配される。そもそもちまきはご利益が 1 年間で文化的には持続できないが 1 年を区切りにつけはじめをつける、気持ちを新たにするという役割もある。



設置した和コーン



フラクタル的

■ 祇園祭を超えて…

“フラクタル” は地方と都市における商業、農業、エネルギー循環などに応用できるのではないか。

■ SDGs を超えて…

祇園祭は確かに暑い。この暑さ(その時々の人々の生活環境に対する問題)に対して何かアクションを起こそうとする、してきた、ということはその行動の背景には人々の自然や周辺環境に対する熱い想いが存在するのではないか。

想いの詰まった祭りを実行していくことはある意味で面倒であり、大変である。つまり祭を行うためには人生を費やすほどの大きなエネルギーが必要だということであり、実際にエネルギーをかけてきた。だからこそ積み上げられてきたものは運営の立場からも客の立場からも「誇り」が存在する。そしてこの熱量も儀式とともに 1150 年間持続されてきたとは言えないだろうか。